



とつとつ ダンス

2025年度
活動報告書



一般社団法人 torindo

<とつとつダンス> 2025年度活動報告書

目次

はじめに	P.1	ひびき合う音
ことば	P.2	ことばでつたえる
	P.3	ことばでつたえる<年表>
	P.4	ことばでつたえる／活動報告
	P.5	ツールキット概要
	P.5	マイケル・チェン インタビュー
	P.7	オードリー・ペレラ インタビュー
	P.8	エッセイ(アサノタカオ) シンガポール、やさしい遊び、夕ぐれ時のダンス
	からだ	P.10
	P.11	からだでつたえる<年表>
	P.12	からだでつたえる／活動報告
	P.13	出演者インタビュー(クロエ・タン、シルヴァ・イー)
ことばとからだ	P.15	活動報告交流会
	P.16	分からなさを持ち続けること(石田智哉)
おわりに	P.17	<とつとつダンス>が身体で語ること(神村恵)
	P.18	<とつとつダンス> 2025: ツールキットをめぐる旅(砂連尾理)

ひびき合う音

豊平 豪（一般社団法人torindo代表理事）

京都府舞鶴からはじまり、マレーシア、シンガポール、東京、鹿児島へと活動が広がっていく過程で「砂連尾理が不在ならば<とつとつダンス>ワークショップはできないのか」と幾度となく相手から問われてきた。「<とつとつダンス>はとても気に入った」「これからもやっていきたい。もっと身近なリソースを使ってできないのか」と。

確かに、毎回、砂連尾と<とつとつダンス>チームを呼ばなければならないとなると費用やスケジュール調整の手間もかかるし、継続性も見込めない。そこから<とつとつダンス>のエッセンスを別のダンサーやアーティスト、介護者につたえようとする試みがはじまる。ファシリテーター育成とでもいおうか。

もちろん、曲がりなりにも2009年から16年継続しているので、<とつとつダンス>のエッセンスが十全につたわっていると確信できることは幾度もあった。たとえば、2022年からお世話になっているマレーシアの老年学者のセシリア・チャンや舞鶴で長らく一緒にやってきた看護師の仲井なるみさんたちは、自身で読み解いた<とつとつダンス>的な「何か」を、自分の介護に自在に組み込み、自ら発信するようになっている。

ことほどさように、<とつとつダンス>に継続して関わり、ともに「踊る」ことができれば「言わずともわかる」ことは明らかだけど、この4年間で大事になってきたことは、新たな地域でそのための第一歩をどう作り出すかということだった。もっといえば、活動が広がるにつれて、フェーズが変わり、<とつとつダンス>を「誰か」が「誰か」へつたえる手段が必要になったのだと思う。波紋が互いに影響を与えながら、広がっていくように。

連なって続く試みのなか、4年目になる今年度は「<とつとつダンス>をつたえる」点において、二つの大きな成果をあげることができた。一つはパフォーマンスの形式を確立できたこと、そしてもう一つはツールキットの制作ができたことだ。

前者については、砂連尾と神村恵に加えて新たなダンサーや認知症高齢者や介護者とともに行う上演形式をマレーシアのジョージタウンフェスティバルで公開することができた。パフォーマンスを通じて、共演者や観客に「<とつとつダンス>をつたえる」フォーマットが整理されたことで、今後も新たな地域でパフォーマンスができる可能性ができた。

後者のツールキットについては、2024年度の活動に参加してくれたシンガポールのアーティストで教育者のマイケル・チェンとの共同作業になった。マイケルがワークショップや参与観察を積み重ねながら丁寧なことばを綴ってくれたことで、単なるマニュアルではなく、どちらかといえば、心構え、哲学的な側面にも気を配ったすばらしいものになった。

今後はこの二つの確かな成果を通奏低音として、活動を広げ、深化させていくつもりだが、「つたえる」を念頭において企画を整理する今年度の作業は、結果として関係者全員がそれぞれの<とつとつダンス>を考える機会にもなった。本報告書でもさまざまな執筆者が<とつとつダンス>について語ってくれている。

すでに音源はこれまでのように一つではない。多様な声の波が重なり合って、新たな<とつとつダンス>が響き合い始めている。その脈動を確かに感じる。

ことばでつたえる

ジョージタウンフェスティバルでのパフォーマンス公演と並行し、シンガポールでは<とつとつダンス>ワークショップのメソッドを共有・普及するためのツールキット制作を進めた。本章では、高齢者とのダンスワークショップとして始まった<とつとつダンス>が広がり、続いていく中で、「ことばでつたえる」ことを目指した背景と過去の取り組みを整理し、今年度に行った言語化に向けた実践について報告する。

言語化を試みることになった背景

現在ではワークショップとして広く知られるようになった<とつとつダンス>だが、そもそもは2010年に舞鶴で行われたパフォーマンス創作からはじまっている。だからなのか、砂連尾もチームも、「ワークショップ」と言いながら、一度きりの、その場限りのパフォーマンスだと今でも思っている節がある。パフォーマンスだから、説明は無粋、まずは現場でご覧ください、という意識がどこかにあったように思う。

しかし、2022年度より海外での活動をはじめたときに、それでは立ち行かなくなった。英語と日本語の言語的違いもあると思うが、とにかく「目的」と「狙う成果」をはっきりさせなければ受け入れてもらえない。わたしたちはパフォーマンスを持ち込みたいのではなく、「ワークショップ」をやりたいのだから、当然と言えば当然のことだ。

以降、砂連尾と話し合いを続けて、2023年度に何とか4つのキーワードで<とつとつダンス>をまとめ、それをもとにアーティストに向けてワークショップを実施し、2024年には大阪でパフォーマンスも上演した。とはいえ、「ことばでつたえる」ための次の一步を、踏む先がわからずにいた。

そんな折、ワークショップに参加したシンガポールのアーティストのマイケル・チェンから、ツールキットというかたちで一度<とつとつダン

ス>ワークショップを文章でまとめてみないか、と提案があった。2024年度の大阪のホテルのロビーでコーヒーを飲んでいるときだったと思う。

ツールキットという踏み込む先を得て、<とつとつダンス>をことばでつたえる作業は明らかに次のステージに達したと感じている。



1・シンガポールでのツールキット制作に向けた打ち合わせの様子
2・3・舞鶴でのワークショップの様子

年表

2023-2024年の活動における「ことばでつたえる」試み

● 2023年夏<シンガポールへ渡航>※1

- 8月8日 介護者に向けた活動紹介、ワークショップ制作のレクチャー
「ダンスをやっていた経験があるので、ダンスやアートの創造的な力が認知症高齢者の力になることがわかるような気がする」(参加者より)
- 9月7日 アーティスト向けワークショップ
<とつとつダンス>の説明後、<とつとつダンス>を構成する4つのキーワード(「呼吸を合わせる」「距離を測る」「目を合わせる」「触れる」)について解説。それらに基づきワークを実践。

● 2023年末<活動報告展示会>※2

- 12月3日 報告会でのトーク・セッション
オードリー・ペレラ(シンガポール現地コーディネーター)を招き、シンガポールでの認知症ケアとアートの現状、<とつとつダンス>に期待されることなどを話し合った。

● 2024年夏<シンガポールでのワークショップ>※3

- 8月12日 若手アーティスト向けレクチャー型ワークショップ
4つのキーワードをもとにレクチャーを実施。
ツールキット制作に携わったマイケル・チェン(教育者)初参加。
- 8月13日 アクティブ・エイジング・ケア・センターでのワークショップ
～8月15日 8月12日のレクチャーに参加した5名をファシリテーターに迎え、施設利用者に向けた3日間のワークショップを実施。
- 8月18日 若手アーティストとの振り返り
3日間のワーク振り返り、<とつとつダンス>の新しいワークショップのアイデアを発表。

※1<とつとつダンス>2023年活動報告書 P6-7参照

※2=P17参照

※3<とつとつダンス>2024年活動報告書 P13参照



2025年度の活動報告

昨年度の<とつとつダンス>ワークショップに参加したマイケル・チェンとシンガポールでのコーディネーターであるオードリー・ペレラとともに、「ツールキット」を制作。そこに至るまでの国内外での動きを紹介する。

シンガポール



シクオン・ワイ・シウ病院でのスタッフ向けワークショップ

● 7月30日

クオン・ワイ・シウ病院で、高齢者向けのアクティビティを行っているスタッフを対象にワークショップを開催。マイケル・チェンがイントロダクションを担当。「目を合わせる」「ゆっくり歩く」など、とつとつダンスで大切にしている5つの要素を体験した。(参加者：16名)

● 8月1日

アリワイ・アートセンターで日本とシンガポール双方の混成メンバーによるミーティング。マイケル主導のワークショップも実施。構成案について意見を交わし、章立てが見え始める。クオン・ワイ・シウ病院で利用者向けワークショップを開催。車椅子の方やケアスタッフらも交え、ゆっくり息をする・目で挨拶・触れずに通じ合うなどのワークを実施した。(参加者：31名)

● 8月2日

ツールキットの目的、ファシリテーター像、必要なサポートなどを共有した。

舞鶴

マイケルが来日。制作チームとともに、<とつとつダンス>はじまりの地・舞鶴で、施設でのワークショップを実践しながら、ツールキットの詳細を詰めていった。

● 9月16日

「特別養護老人ホームグレイスヴィルまいづる」を訪問。「ツールキット」についてミーティングを行った後、入居者メンバーに向けたワークショップを開催。即興で『砂連尾さんの歌』をつくって歌うなど。(参加者：8名)

● 9月17日

「グレイスヴィルまいづる」で開催されている、デイサービスの高齢者向けのアクティビティに砂連尾、神村が参加。(参加者：21名)
「特別養護老人ホーム真愛の家 寿荘」を訪問。介護度の高い入居者に向けたワークショップと、比較的介護度の低い入居者に向けたワークショップを開催。(参加者：53名)

● 9月18日

「グレイスヴィルまいづる」を再び訪問。施設長とスタッフから、<とつとつダンス>が与えた影響についてヒアリング。その後、フロアにあった古い黒電話を介し、砂連尾と参加者のワークショップを行う。(参加者：3名)

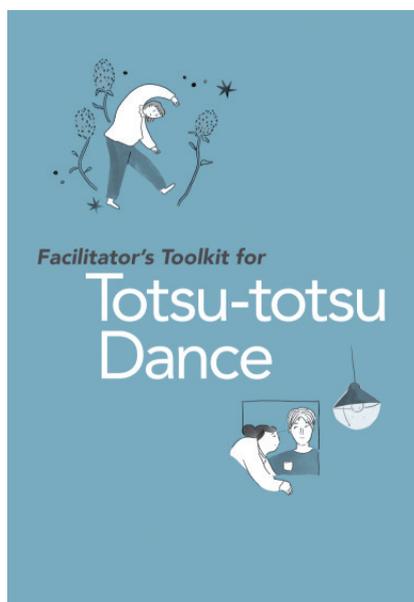


「特別養護老人ホームグレイスヴィルまいづる」でのワークショップ

『<とつとつダンス>ファシリテーション のためのツールキット』について

<とつとつダンス>をやってみたいと希望するダンサー、介護施設スタッフらに向けて編集された。<とつとつダンス>の哲学や方法論を伝えるだけのものではなく、方法論の背後にある「生きた手触り」を含めて丁寧に伝えるものとなっている。本プロジェクトが始まるきっかけとなった特別養護老人ホームグレイスヴィルまいづるの施設長らへのインタビューを通し、長年かけて培われた<とつとつダンス>の要素やその変化を探るテキストを掲載。マニュアル本としてではなく、「親しい伴走者」としてのツールキットを目指した。

<とつとつダンス>ファシリテーションのためのツールキット



2026年3月 ©torindo



発行：torindo

著者：マイケル・チェン

編集：オードリー・ペレラ

デザイン：カマルジ・ペロ

イラストレーション：

イップ・ユーニス

ツールキット著者のマイケルと編者のオードリーに、制作の背景や意図について質問した。

ツールキット著者 マイケルへのQ&A

1 ● <とつとつダンス>ツールキットを制作することになった背景や経緯について教えてください。

私が<とつとつダンス>を知ったのは、振付家の砂連尾理さんと torindo とのコラボがきっかけです。2023年より、認知症の方々、介護者、アーティスト

を対象としたシンガポールでのワークショップに参加していますが、印象に残っているのは、その踊りの型ではなく、彼らの理念と倫理観です。<とつとつダンス>には基本的なシステムはありますが、それは彼らの倫理観に基づき構成されています。そこにはそのシステムから離れて即興で対応する余白もあり、相手に合わせて多様な反応を返す余裕があります。ワークショップの踊りや表現は尊い瞬間を引き出し、時には笑ってしまうような可笑しい瞬間も生み、人と繋がり、互いの存在を認める時間が生まれます。

私自身、応用演劇を障害支援や教育、コミュニティ作りの場で実践するものとして長らく考えてきたことは、人の尊厳、力関係、傾聴すること、そして他者

と繋がることです。大概、私が考えることは「どう支援し、傾聴し、対話をするか」であり、「どう指導すべきか」ではありません。ケアやアートの実践の場では、善意だとしても、一方的な指導のもと「目標達成」が優先されていることが少なくありません。それは言葉による指示と、受け手の理解力に頼らざるを得ません。〈とつとつダンス〉はそれとは異なる可能性を提示しています。彼らは他者と繋がる場を提供していますが、言語や記憶、身体の可動性に頼りません。それに代わるものとして互いの存在、呼吸、距離感や（任意の）接触を用います。

こうした経験を振り返る中で、ツールキットを作ることの意義と課題が明らかになりました。〈とつとつダンス〉は人との関わりの中で行われるケアの実践であり、重要な取り組みです。どうすればファシリテーターはその理念と倫理観を保ちながら、自信を持ってワークショップを実施できるでしょうか？ torindoからのツールキット制作の依頼は、未来のファシリテーターたちへその理念を伝授するため、〈とつとつダンス〉の中核に飛び込む機会でもありました。心して引き受けよう、と決めました。

このツールキットは〈とつとつダンス〉メソッドの統一化を目指すものではなく、その理念を明確に記し、〈とつとつダンス〉が持つ余白を伝えることを目指しました。私にとって転換点となったのは、torindoにご招待いただき〈とつとつダンス〉が生まれた場所である京都・舞鶴の高齢者施設を訪れたときです。現場を訪問し、ファシリテーターと時間をともにすることで、この美しいケアメソッドがどう形成されてきたのか、理解を深めることができました。〈とつとつダンス〉という人と人の間に起こる非言語のコミュニケーションを、その優しさや遊び心を漏らさずに、共有できるかたちにできていたら、と切に願います。

2 ● ツールキットに込められた思いや制作意図について聞かせてください。

当初から、〈とつとつダンス〉の精神を損なわずに、広くアクセシブルなものにしたい、と考えていました。またそのメソッドを生み出した作り手の倫理観や理念を踏襲しつつも、私自身の理解と解釈を織り込みたいとも思っていました。テクニックや

エクササイズを集めただけのマニュアル本にしたいことは確かでした。〈とつとつダンス〉は、その本質からして、一辺倒のシステムに抗います。誰かに従うのではなく身体に合わせて自由に試せる場ですし、テクニックではなく関係性に基づいています。そのためツールキットは「やり方」だけではなく「在り方」も提示しなくてはなりません。

重要視した理念は「尊厳」です。ツールキット全編を通して、どう目前にいる他者を敬うのか、という問いが頻出します。これは認知症の方々から介護者、ファシリテーター、そして自分自身までを対象にした問いかけです。例えば、コンセンサスは一度きりの合意で終わり、ではありません。瞬間ごとに、相手の言葉やボディランゲージを聴いて、確認を続ける必要があります。身体への接触は常に任意であり、毎回許諾を得る必要があります。そしていつでも止めることができます。躊躇や拒絶もまた大事なコミュニケーションであり、決して反抗であるとは考えられていません。

もう一つ意図したことは、自らを「アーティスト」と思っていないファシリテーターも応援できるようなテキストを目指す、ということです。介護者の多くは自分が「表現下手」であるとか「クリエイティブではない」という不安を秘めています。このツールキットではどんな動作にも——じっと動かないことに——意味がある、と強調しています。同時に、ツールキットが彼らの出発点となる必要性も感じました。そのため、とつとつダンスの指針を記載し、自己分析のための質問や、ファシリテーター向けの注記など、ただ従うだけのレスンプランだけではない情報を織り込んでいます。

文化的な配慮もツールキット制作に影響しています。〈とつとつダンス〉はさまざまな国やケアの文化へ渡りますので、身体、パーソナルスペースや身体接触に関する「当たり前」をできるだけ解体したテキストを目指しました。ファシリテーターにはそれぞれの環境、参加者、習慣に合わせた実践を奨励しています。

とどのつまり、このツールキットが読む人の相棒、よき伴走者になれたらと願っています。従うべき権威ではありません。ファシリテーターが対面する相手に向けて、優しいケアを実践できるよう、呼吸や

好奇心、遊び心も忘れずに、偶発するさまざまな出来事を安心して経験するためのツールキットです。



マイケル・チェン

応用演劇を実践し、介護、コミュニティ作り、創作の場を結ぶ教育者。これまで携わってきた文化背景は多岐にわたる。心理療法と参加型のアートに根付いたプログラムを構成／実地し、心身の健康を向上し、自省を促し、他者と意識的に関わることが目指した取り組みを行っている。学校、公的組織、美術系の施設や世代を超えたグループなど幅広く関わり、アジアのみならず世界各国でコラボレーションの経験を持つ。これまでの特別支援、コミュニティアート、物語療法の経験をいかし、人が安心して自分の内面と向き合い、共感を持って他者に耳を傾け、新しい視点に心を開ける場所を作る。

ツールキット編集者

オードリーへのQ&A

1 ● ツールキットの制作を通して

得られた発見や、新たに明らかになった課題について教えてください。

<とつとつダンス>の第一印象は極めてシンプルですが、その根底に哲学的な在り方があると気づいていました。今回私の同僚であるマイケル・チェンさん制作のツールキットを読み、その気づきをさらに深めることができました。<とつとつダンス>のメソッドをテキストで追えることは、理解するための大きな助けになると感じます。

<とつとつダンス>とは根本的には、感情のやりとりを通じ、人と人が繋がりうる場です。そして外部からの刺激にどう反応するかは人それぞれであり、反応の仕方に間違いはない、と認識する場でもあります。私が学んだことは、こうした「繋がりあう瞬間」がいかに刹那的であろうとも、その一瞬が私たちを人間たらしめ、私たちに感情を与えてくれるものである、ということです。このシンプルな学びの実践が、<とつとつダンス>が取り組んでいるチャレンジです。<とつとつダンス>の理念を理解しないままかたちだけを追ったとしても、それは世にありふれる「高齢者向けのアクティビティ」の一つに

なってしまいます。ファシリテーターの理解度、心の状態、判断基準、忍耐力と寛容さが、<とつとつダンス>がもたらす結果に直結しています。

2 ● どのような人たちに

このツールキットを使ってほしいと考えていますか。また、どのように活用されることを思い描いていますか。

プロの現場か家庭内かを問わず、介護に携わる方々が被介護者と共に活用していただくことを望みます。事前に<とつとつダンス>についての理解を深めることが理想的ではありますが、その予備知識がなくとも「繋がりあいの在り方／その方法」を考えてみるきっかけとなるはずで。焦らずに長期的に活用することで好ましい結果が得られるでしょう。

ツールキットのエクササイズを試してみたり、他者と繋がりあうさまざまな方法を見つけたり、あるいはご自身の経験に基づいて、自分なりの理解を深める手助けになるのでは、と想像しています。ツールキットは無料のリソースとしてさらに学びたい方が世界中どこからでもアクセスできます。この情報が世界へ無償で提供されることは、<とつとつダンス>プロデューサーのtorindo、およびメソッド考案者の砂連尾理さんの多大なる寛容さを示しています。



オードリー・ペレラ

30年余りアートフェスティバルのプロデューサーを務め、それより長く作家／編集者として活動。キャリアの変化と発展を続けており、ワールドミュージック

とそのダンスから始まり、シンガポール伝統音楽および舞踏へ、そしてジャンルを超えたインクルーシブアートへと展開。現在はパフォーマンスアートをセラピーの一貫として、そして世間の意識改革に繋げることを目指してその制作に携わる。True Colors Festivalのディレクター／プロデューサーとして2018年に第一回目をシンガポールで開催し、2025年まで担当。2023年より<とつとつダンス>と協働して、シンガポールでのメソッド普及に務める。これまで高齢者、ケアワーカー、介護者向けのワークショップを国内の研究機関など3箇所で開催したほか、養成ワークショップとしてシンガポールの芸術家に<とつとつダンス>のメソッドと理念を伝える。現在、ファシリテーターを対象としたツールキットの編集に取り組んでおり、ラサール芸術大学シンガポールとの協働での発表を予定。

シンガポール、やさしい遊び、夕ぐれ時のダンス

アサノタカオ(編集者)

夏のシンガポールにやってきた。

初めてのチャンギ国際空港では入国審査の際、モニターの前で顔認証だけをしてパスポートの提示すら必要ないことに驚いた。地下鉄の自動改札を通り抜ける程の気軽さで、旅客たちが次々と入国していく。審査窓口の前で列に並ぶ必要もなく便利といえば便利だが、監視テクノロジーに自分の「顔」を盗み取られた気がして少し不安になった。

空港から送迎の車に乗って宿に入った。午後6時を過ぎても街は明るい。部屋の窓から外を眺めると、湿気を含む空気が光を散乱させて景色を薄い赤に染めている。

近所に屋台村があるので、そこで牛肉と臓物と野菜を香辛料入りのココナッツミルクで煮込んだ「ルンダン」というマレー料理を食べた。その後、夜の街を散歩。長時間の移動でこわばった体がほぐれ、汗が吹き出す。赤道直下のモンスーン地帯、マレー半島南端の国にいることを僕はようやく実感した。

シンガポールに来たのは、振付家・ダンサーの砂連尾尾さんらによる<とつとつダンス>のプロジェクトに参加するためだった。

<とつとつダンス>とは、京都・舞鶴など各地の老人ホームに入居するお年寄り、施設のスタッフや地域住民と共に砂連尾さんが行うダンスワークショップと公演のこと。近年は海外の認知症ケアの現場でも活動を展開し、シンガポールでは英語版のワークショップ・マニュアル(通称「ツールキット」)の制作が進行している。砂連尾さんの著書『老人ホームで生まれた<とつとつダンス>』の編集を担当した縁で、自分も同行することになった。

カンボン・グラムという歴史文化地区にあるアライ・アートセンターで、到着翌日からツールキット制作のための3日間のミーティングに参加した。メンバーは日本側の砂連尾さんたち<とつとつダンス>のチーム5名と僕、シンガポールからはアートプロデューサーであるオードリー・ペレラさん、応用演劇のファシリテーターで俳優のマイケル・チェンさん、そして通訳のNさん。

そもそも<とつとつダンス>を英語にどう翻訳すればいいのか、という点が問題だった。

ダンスのようでもあり介護のようでもあり、そのどちらでもないような身体コミュニケーションの実践を別の言語、別の文化、別の社会に生きる人にどうすれ

ば理解してもらえるか。暗中模索の話し合いが始まった。

まず、「理解」ということについて根本から考え直す必要があった。砂連尾さんは、<とつとつダンス>でのコミュニケーションを言葉以前の身体感覚を手掛かりにして始める。聞こえない呼びかけに応じるように認知症の人やお年寄りの方へ近づくその動きは、何かが「伝わる」こと以上に「伝わらない」ことのおもしろさ(西川勝『となりの認知症』)に惹かれている。論理的な言葉での説明が難しく、必ずしもケアの文脈に収まらない一回限りの交換=交歓の機微を体で捉えて表現すること。そうすることで、「伝わる」だけをよしとする僕らの常識的なコミュニケーション観を揺さぶり、人と人が共にいるもう一つ別の可能性を見せるのが砂連尾さんのダンスなのだ。

英語版ツールキットは、こうした<とつとつダンス>の方法を日本以外のケアの現場に導入するために制作される以上、「伝わらない」ことを重視するその本質を「伝わる」ものに翻訳しなければならない。そこに今回のプロジェクトの難しさがあり、シンガポール特有の事情もそこに加わる。

シンガポールは、英語・マレー語・中国語・タミル語の4つの公用語がある多言語社会で、さまざまな文化的背景をもつ人々が共に暮らす。老若男女の住民が日常的にバイリンガルとして生活し、公の場面ではおおむね「英語」が共通言語として使われる。滞在中に中華系のクオン・ワイ・シウ病院に併設された高齢者施設を訪問したのだが、ケアの現場で働く女性たちの中には片言の英語を話す周辺のアジア諸国出身者が多いことも知った。

同質的な日本語環境であれば阿吽^{あうん}の呼吸ですませられることも、ここではそうはいかない。シンガポールのような多言語・多民族の国でツールキットを機能させるには、<とつとつダンス>についてシンプルな英語で説明し、最低限の合意を得るところから出発するしかないのだ。

「<とつとつダンス>をGentle Playと言い換えてみるのはどうだろうか?」

会議室のホワイトボードの前で、マイケルさんがミーティングの参加者に語りかけた。「やさしい遊び」。マイケルさんのそれまでの話も踏まえれば、「他者の尊厳に触れる、穏やかでやさしい遊び」というニュアンスだろうか。皆が静かにうなずいている。

学生時代に文化人類学の授業で習った「Deep Play」のことを思い出した。クリフォード・ギアツがバリ島の闘鶏を分析する際に使った用語。祭りの熱狂の中で法外な額の金品のみならず、名誉や地位が賭けられ、村落共同体の権力関係や対立構造が露わにされるのがバリ島の闘鶏だという。ギアツはそれを単なる賭け事ではなく、バリ文化の世界観を象徴的に表現する「深遠な遊び」として読み解いた。

Deep PlayとGentle Playには、どんな違いや連続性があるのか考えるのも面白そうだ。世界各地の文化で伝承されるGentle Playの事例を探すのもいいだろう。そして歴史的・空間的に異なった形で現れる「遊び」を比較対照しつつ大きな展望に置き直すことで、砂連尾さんたちの活動の新しい意味も明らかになるかもしれない――

マイケルさんの人懐っこい笑顔を眺めながら、「とつとつダンス」を翻訳する道行に一筋の光が射すのを見つけた気がして、僕はうれしくなった。

不思議なことがあった。

それはクオン・ワイ・シウ病院の施設で行なわれた、お年寄りスタッフ対象の<とつとつダンス>ワークショップでのことだった。

砂連尾さんの進行で「ゆっくり呼吸する」「距離を測る」「目を合わせる」など二人一組のペアワークをやった後、もう一人のダンサーである神村恵さんが車座になったお年寄りを相手に踊り出す様子を僕は観察していた。

神村さんとワンピース姿のおばあさんの息があったようで、二人は近づいたり離れたり、視線を合わせたり外したりして遊んでいる。やがて神村さんは、椅子に腰掛けるおばあさんの顔に自分の顔を寄せ始めた。そしてそっといたわるようなやり方で、頬を頬でなぞり、頭を頭でこするような動作をしばらく続けてから神村さんがこちらを振り向いた時、僕はびっくりして声を上げてしまった。

ほんの一瞬のことだが、神村さんの「顔」がおばあさんの「顔」になったように見えた。神村さんの顔の表面に、おばあさんの表情のみならず、顔に刻まれた皺、肌の艶と乾き、額にかかる前髪が小さく揺れる感じまでもが正確に再現されているように見えたのだ。

お互いの心中をさらけ出し合うような重々しい対面状態ではなく、^{うら}の^{ない}お^もて^{だけ}を無言で交わす軽やかな関係性の中で、「顔」を「顔」に写し取るやさしい遊び。仮面を取り替えるように自らの面^{おもて}を相手に合わせて変化させるダンサーの身ぶりは、まるで魔法のようだった。単なる思い込みかもしれない。でもそこに、空港で経験した顔認証テクノロジーと対極にある何かが見れたことは、確かなことのように思われた。

シンガポール滞在最終日、僕は仕事の用事を片づけた後、次の旅に備えて洗濯をすることにした。翌日からマレーシアのパナン島に渡り、ジョージタウン・フェスティバルというイベントで開催される<とつとつダンス>の公演に立ち会う予定だ。

西陽が強く射し始める頃、たまった洗濯物を抱え、宿の近くの団地にあるコインランドリーへ歩いて行った。機械に専用のコインを投入し、ドラムの中に洗濯物を入れてドアを締め、重量や水温や洗い方を選んでスタート。待合室のベンチには、裸足のおじいさんとおばあさんが座っていて何やら話し込んでいる。

洗濯が終わるまで、団地の中庭で何もしないでぼんやり過ごすことにした。この日も景色は薄い赤に染められ、あたりには気持ちのいい海風が吹いている。仕事帰りの人びとが行き交い、老人たちが体操していて、子どもらが自転車で走り回っている。背の高い木はレインツリーだろうか。見上げると、黒い鳥が枝に止まって甲高い声で鳴いていた。「夕ぐれの時はよい時、かぎりなくやさしいひと時」とある詩人は言ったが、それは本当だ。

30分ほど経ってコインランドリーに戻った。と、待合室のベンチに裸足のおじいさんとおばあさんがまだ座っていて、先ほどとまったく同じ姿勢で話し込んでいるのだった。

よく見ると、おじいさんとおばあさんの「顔」は瓜二つだった。

Gentle Playの達人がここにもいる、と僕は思った。シンガポールのコインランドリーで二人のお年寄りが身を寄せておしゃべり続ける姿は、いつまでも眺めていたい夕ぐれの時のダンスだった。

アサノタカオ

編集者。1975年生まれ。サウダージ・ブックスの編集人をつとめるほか、文学・人文社会・アートなどの領域で仕事をしている。著書に『小さな声の島』など。



からだでつたえる

torindoでは2025年、<とつとつダンス>をあらためて身体表現として捉え直す試みとして、マレーシアの国際舞台芸術祭「ジョージタウンフェスティバル」に参加し、現地のダンサーやアーティスト、高齢者、介護者とともにパフォーマンスを行い、多様な身体が交差する場を創出した。本章では、高齢者とのダンスワークショップとして広がった<とつとつダンス>が、どのように発展してきたのかを振り返るとともに、身体性に着目するに至った背景、付随する過去の取り組みを整理する。その上で、今年度を実施した<とつとつダンス>をからだ(パフォーマンス)でつたえる側面について報告する。

からだ(パフォーマンス)で伝えることを試みるようになった背景

砂連尾以外のダンサー、アーティスト、介護者、もっといえは認知症者さえもが、ファシリテーターになって<とつとつダンス>を行うことは可能なのか。可能だとしたら、どのように伝えればよいのか。

まず、砂連尾とともに考えたのは、<とつとつダンス>の肝となっている部分を、不十分なかたちであれ、まず自ら言語化してみることであった(2022年度の試み)。そこから言語化したものを「どのように他者と共有していくのか」という課題が生まれる(2023年度以降)。

この問いについて砂連尾と<とつとつダンス>チームが出した答えの一つが「パフォーマンス」であり舞台公演だった。言語化したものを核にして、多様な参加者とともに身体をつかったパフォーマンスを作り上げる。そこで練り上げられた<とつとつダンス>のエッセンスが、参加者はもちろん、観客にも共有されていくのではないか。

適した「かたち」を探るために、2022年から企画に並走している神村恵とともに2023年度に東京でワークイン・プロGRESSを試み、その成果をもとに2024年度に大阪でパフォーマンス公演を行った。ここでひとまず「かたち」のかたちができ、今年度、マレーシアのジョージタウン・フェスティバルのプログラムとして現時点の「かたち」を公開することができた。

その効果を検証していくのはこれからだか、ひとまず「からだでつたえる」かたちを整えることができたと考えている。



1、2、3・ジョージタウンフェスティバルでのダンサーによる稽古風景

年表

2023-2024年の活動における「からだでつたえる」試み

● 2023年夏＜マレーシアへ渡航＞※1

- 8月3日 高齢者ケアセンターでのワークショップ
 ～8月4日 このときの記録映像が2025年の大阪公演、マレーシア公演でも使用された。
 8月5日 マレーシア在住アーティストとのワークショップ、
 のちにジョージタウンフェスティバル公演に出演するクロエ・タンが初参加。

● 2023年末＜活動報告展示会＞※2

- 12月2日 報告会でのパフォーマンス
 ～3日 東京にて、砂連尾と神村の身体パフォーマンスを中心に、
 マレーシアでの活動に参加したオクイ・ララの朗読、鹿児島訪問に参加した
 石田智哉の語りなどが折り込まれたワークイン・プロGRESS公演を実施。

● 2024年夏＜関東でのワークショップ＞※3

- 7月21日 東京近郊に住むアーティスト向けワークショップ
 ＜とつとつダンス＞の活動をどのように広めるかをテーマに実施
 9月17日 東京の高齢者住宅でのワークショップ
 7月のワークショップに参加した大迫健司、過去に砂連尾の公演に参加した
 西岡樹里がファシリテーターとして参加。

● 2024年10月秋＜鹿児島訪問＞※4

- 10月31日 ホームホスピスあんまゝの家での滞在
 ～11月2日 西岡が同行し、大阪公演ではここでの体験を語った。

● 2025年年始＜マレーシアへ渡航＞※5

- 1月4日 バガン病院が主催するリトリートプログラムへ参加
 ～1月5日 認知症者とそのケアパートナーに向けてワークショップを実施。これに参加した
 タン氏の日記は、ジョージタウンフェスティバル公演でも自身によって読み上げられた。

● 2025年年始＜パフォーマンス公演＞※6

- 1月25日 パフォーマンス公演in大阪を実施
 ～1月26日 大迫、西岡、石田も舞台に上がり、砂連尾や神村とともにクリエイションに参加。
 今は亡き、かつてのワークショップ参加者と砂連尾のやりとりを、当時を知らない
 大迫と西岡が“再現”するシーン、石田が彼の視点から観察したとつとつダンス>
 を、自身の経験と感覚を踏まえ考察したテキストを朗読するシーンも盛り込まれ、
 ワークショップを通じて現れる＜とつとつダンス＞が表現された。

※1＜とつとつダンス＞2023年活動報告書 P4-5参照／※2=P16参照

※3＜とつとつダンス＞2024年活動報告書 P13参照／※4=P10／※5=P6／※6=P14参照

2025年度の活動報告

ペナン公演 in ジョージタウン
フェスティバル2025

日時 2025年8月6日(水)、7日(木)
会場 ヒン・バス・デポ
(Hin Bus Depot) (ペナン/マレーシア)
出演 砂連尾 理(ダンサー・振付家)、
神村 恵(ダンサー・振付家)、
クロエ・タン(ダンサー)、
シルヴァ・イー(ダンサー)、
カマル・サブラン(サウンドアーティスト)、
バガン病院高齢者ケアセンター・
Urut-Urutプロジェクトの皆さんほか
来場者数 約250名

ジョージタウンフェスティバルは、マレーシア・ペナン州で毎年開催される、ダンス、音楽、映画、写真など多様な芸術分野を横断する国際的な芸術祭である。本フェスティバルに、前年度に大阪で上演した作品を基に再構成したダンス公演<とつとつダンス>が招聘された。クリエイションには、2023年にクアラルンプールで実施したワークショップに参加したマレーシアの若手ダンサー、クロエとシルヴァが加わり、継続的な対話と共同制作を行った。

上演では、大阪公演での実践を踏まえ、すでに亡くなっている舞鶴でのワークショップ参加者と砂連尾とのやりとりが収められた映像を元に、クロエとシルヴァが身体表現として「再現」する場面を構成した。また、マレーシアでのワークショップ参加者であるタン氏が、介護体験を自身で記録したテキストを朗読するシーンを取り入れ、記憶や関係性が個人の声として立ち上がる構成とした。会場にはフェスティバル来場者に加え、これまでマレーシアで協働してきたアーティスト関係者も多く訪れ、上演後には作品や実践のあり方について活発な意見交換も行われた。



クロエとシルヴァが、かつてのワークショップを再現するシーン



ステージを離れるパフォーマンスの姿を追うカメラの映像をプロジェクターに投影するラストシーン



公演には多くの観客が訪れた

写真:Thum Chia Chieh courtesy of GTF

出演者インタビュー

ジョージタウンフェスティバルでの公演に出演したダンサー、クロエ・タンとシルヴァ・イーに、公演についての感想を聞いた。

クロエへのQ&A

1 ● パフォーマンス終了後の感想

プロジェクト全体にお互いへの配慮、敬意、そして信頼を感じました。そして当然のように同じエネルギーをシルヴァさんと私へも注いでいただきました。シルヴァさんとも話しましたが、みなさんが一丸となって働く様子に二人とも感銘し、尊敬の念を覚えました。一人ひとりがそれぞれやるべきことに全力を尽くし、プログラム制作の初めから終わりまで、風通しのいいコミュニケーションを感じました。

その他にも、率直なディスカッションや意見の交換が行われていたことにも感心しました。砂連尾さん、神村さんはいつだって真摯に答えようと心がけていましたし、現場に好奇心と問いかけを持てる余白を作り、私たち個々の身体にとって自然なことを見つけるように促していただきました。プログラムに参加する上で、このフォローがとても重要だったと感じています。過去の上演記録の参照も大切でしたが、同時に私の中に湧き立つもの、あるいは私の身体にとって正しいと感じるもの、そうしたことを彼らのおかげで信じることができました。

2 ● 今回の体験が、ご自身の表現や創作活動にどのようにつながり、どのような影響がありましたか

以前ダンス／ムーブメントセラピーの実習を受けた際に、高齢者との制作を考えたことがありましたが、これまでその機会がありませんでした。

今回の経験で思い出したのは、身体と動作を介して他者と繋がる美しさ、そして意識的に他者と存在する美しさです。それは華やかさはないかもしれませんが、心を揺さぶる、人生に欠くことのできない大切な実感です。ファシリテーター、オンライン参加者、そして現場の参加者の間に言語や文化の壁があっても、お互いとの繋がりを感じることは可能でした。この事実を通して、私は自分の信念を再確認することができました。やはり、身体はユニバーサルな言語を発し、言葉を超越することができるのです。

身体ごと聴き、感じ、呼吸を合わせることで他者と繋がることは、以前から私の表現の核にあります。砂連尾さん、神村さんがくつつつダンス>で同様のアプローチを実践されていることを目の当たりにし、本当に感化されましたし、勇気づけられました。今回の機会に感謝し、アートとケアを結ぶパフォーマンスの一員になれた経験を今後も大事にしたいと思います。それは、砂連尾さんのたゆまぬ努力、そして認知症者の方々と何年にも渡る共同作業の上に成り立っているパフォーマンスです。ムーブメントアーティストとして、芸術面でも、人と関係と築く上でも、キャリア面でも多くの学びがある経験でした。身体ごと聴くという行為の重要性を再確認し、ケアとしてのムーブメントの力を改めて信じることができました。今後も認知症者の方々や高齢者と協働する機会を探し、その活動を広めたいという気持ちが強まりました。



クロエ・タン（ダンサー）
ダンス（ASWARA、2014年）とダンス・ムーブメント・セラピー（Dance Therapy Training Aotearoa、2023年）を学んだ身体表現アーティスト。好奇心と身体を通した傾聴を実践の中心に据え、身体が宿す物語や、そこに秘められた静かな力を探求する作品に取り組んでいる。

シルヴァへのQ&A

1 ● パフォーマンス終了後の感想

全般を通して素晴らしい経験でした。ペナンでのリハーサルに先立ちオンラインで3回リハーサルを行いました。とても良い準備となりました。画面越しのリハーサルでしたが、チームの意図は明確で、「認知症者と動作を介して繋がる」という点に置いては特にクリアに伝えていただきました。3回のオンラインリハーサルは私たちの間に確かな土台を作り、その上で現地リハーサルに挑むことができました。

ペナンでの制作では、チーム一人ひとりのプロジェクトに対する熱量を強く感じました。私へもリスペクトを持って接していただき、本当に感謝しています。「調和」や「気持ちの共有」といった感覚がリハーサルや本番中に感じられ、そうした瞬間が大切な思い出となりました。

特に興味深かったことは、<とつとつダンス>がオンラインワークショップと現場でのワークショップ、二つの入口を設けていることです。それはよりアクセシブルな間口であり、参加者はいずれかの入口から次の段階へ進み、「人との繋がり」について学びを深めることができます。また認知症者の方々の多種多様な側面をどれも見捨てないことにも感銘を受けました。目には見えない「人との繋がり」が、いたわりと誠実さを持って築かれていることを感じられました。実体験をもとに構成された部分に関しては配慮を持って構成／翻訳されており、文学へと昇華されています。

<とつとつダンス>は私にとって非常に価値ある体験でした。感性を研ぎ澄ませて「聴くこと」そして意識的に「居ること」、その両方が高い精度で求められるパフォーマンスだったからです。

2 ● 今回の体験が、ご自身の表現や創作活動にどのようにつながり、どのような影響がありましたか

耳を傾けること、息を合わせることで、そして動きを介して感じることは、常に私のアートの中心にありました。これらを私のダンスに取り入れることは、同時に、異なる出自の身体と語る方法を学ぶことでもありました。この学びの過程において、特に自分とは違う身体と向き合う時には、たじろいでしまうときもあります。

パフォーマンスでは、極めてシンプルな動作を披露されていたことに心動かされました。それは瞬時にその場の全員が同じ言語を共有しているようでした。「人との繋がり」そして「身体で体感すること」をまず受け止め、論理的な解釈を目指すのはそのあとなのだと、開眼しました。

<とつとつダンス>は、物事の意義はわかりやすくなくても、直接的でなくても良いのだと思わせてくれます。それは身体で世界と関わることでダイレクトに感じられることです。

また<とつとつダンス>がお説教くさかったり、認知症とともに生きる人たちのことを美化しない点も好意的に感じています。ケアとアートのバランスを持つことは私が特に興味を持っている点です。特に個人のバウンダリー（パーソナルスペース）について、例えば互いを尊重すること、実験的であることのバランスの取り方など、こうした問いを常に考えています。

私の夢は認知症者の方々とステージでパフォーマンスを披露することです。その日まで、彼らと動きを介してどう関係を構築するか、まだまだ学ぶべきことがあります。これからさまざまな活動に参加し、行動し、実践を重ねる必要があると改めて実感しました。



シルヴァ・イー（ダンサー）

コンテンポラリーダンス、ダンスシアター、サイトスペシフィック・パフォーマンス、ダンスフィルムなどを横断して活動するムーブメントベースのアーティスト。

協働的なプロセスと、生成し続ける身体への関心を軸に、ムーブメント・リサーチを通して身体的実践が個人や共同体の意味形成にどのように関わるのかを探求している。

“ことば”と“からだ”
 ～とつとつダンス2025年度 報告交流会～

日時 2026年1月24日(土)、25日(日)
 会場 水性-susei- (東京都中野区)
 来場者数 約80名

1日目は、シンガポールのチームと制作した「ツールキット」を活用し、俳優の大迫健司さんをファシリテーターとしてワークショップを行った。ワークショップのあと、参加者の皆さんとカフェ形式の対話の場を設けて、感想をシェアした。

2日目は、国内外で活躍するダンサー・振付家の湯浅永麻さんをゲストに迎え、湯浅さんと砂連尾理による対談を開催した。

両日ともに、イベント終了後には参加者のみなさんと語り合う、交流会の場も設けた。会話が尽きず大勢の方がそのまま会場に残り、熱心に意見を交わした。



昨年と同様に東京都中野区のアートスペース・水性にて実施した



1日目、ツールキットを活用したワークショップの一場面



ゲストのダンサー・振付家の湯浅永麻さん



昨年度の大阪公演に出演した俳優の大迫健司さん



2日目、トークイベントの様子

分かなさをもち続けること

石田智哉 (映画監督)

「居心地」と「対話」は「<とつとつダンス> 2025年度報告交流会」のワークショップとトークイベントのキーワードだと思う。ここで言う居心地は必ずしも「心地よさ」を追求するというワームフルなものではない。人へ驚きや戸惑いを与える可能性も含まれた関係の築き方を指す(だからこそ<とつとつダンス>には「アートのような、ケアのような」という言葉がついているのだろう)。砂連尾理は「認知症者とその介護者とのワークショップは常に緊張する」と述べ、また今回のトークイベントのゲスト、湯浅永麻も「ワークショップという安心できる場所で小さなチャレンジを作り、ざわついた感覚を経験することは、より厳しい人間関係がある外へ出たときの耐性を作るようなこと」だと述べている。目の前にいる他者の身体を手がかりに人との関係の築き方を見つめ直すことも「ダンス」が持つ一つの役割なのかもしれない。

報告交流会の初日は今年度の取り組み「ツールキット」を踏まえ、大迫健司がワークショップを行った。流れは以下の通りだ。車座となり、まず自己紹介を一巡する。次にストレッチが行われ、参加者に一人1アイデアをもらい、大迫がとつとつとコメントしながら身体を動かしていく。アイデアには、例えば、身体をタッピングする、初めての人に見せてはいけない顔といったものがあった。そして2、3のワーク——ギョッと集まる、居心地のよい場を探す、ティッシュと戯れる——へと続く。ワークは2グループに分かれて行われ、休憩後には、振り返りの対話が開かれた。参加者はさまざまな喩えで感想を語っていた。「こたつとみかん」、「遊具のない公園に遊びに来た子ども」、「鎧を外せなかった」、「川の流れ(ダンス)と小石(言葉)」。それぞれの目の前に広がる景色の豊かさを感じた。

ある参加者は「<とつとつダンス>を知らずに来て、何一つ分からないまま終わった。でも、また来たいと思った」と話していた。このようなワークショップやシンポジウムは「問題-解決型」の提起がなされ、参加者もその場に行けば何らかの新しい知見を得られることをつい期待してしまう。一方で<とつとつダンス>は「分かなさ」をもち続ける姿勢が大切にされている。身体条件や文化的背景が異なる人との関わりをテーマにした催しではしばしば「社会課題」という俎

上にのせられる。これまで意識していなかったことが「社会課題」とすることで見えてくることはもちろんある。ただ「問題」や「課題」とする構えた姿勢は、当事者と関わることに妙な力みを生み、チグハグとした「居心地」を発生させることは書きとめておきたい。

2日目は湯浅と砂連尾によるトークイベントが開催された。ある居心地が保たれた上での「対話」は不意にその人の「痛み」へふれることも孕んでいる。ダンスに限らない、あらゆる芸術表現——さらには生活上の人との関わりまで——に共通する問いである。ケアの専門家でない人がその人の痛みにふれた時、どのように向き合えばよいのだろうか？湯浅は「思い悩んでいる時間が大切なかもしれない」と、砂連尾は「皆で考える場、問い続ける場を共有していくことが一つの方法」だと話していた。その人の「痛み」の経験をにくりにすることの乱暴さは注意すべきだが、「分かなさ」をもち続け、ともに揺れてくれる人がいることは「支え」になる。

日中、訪問ヘルパーや訪問看護を利用して生活する身として感じるのは、食べること、排泄すること、寝ることといった「身体ケア」の担い手とは別のかたちで関わる人がいることの心強さである。家族や福祉従事者ではない、第三者とつながって会話すること。徐々に、互いの経験を語り合い「対話」へと移っていくこと。属性一般でまとめられない、個別具体的な「語り」が共有されることに、違いにあふれた本当の多様性がある。nosmosis research(※)や<とつとつダンス>のような「対話」と「ダンス」が往来する場が各地で生まれてほしい。

※nosmosis research:

ダンサー・振付家の湯浅永麻を中心に、身体表現や対話を介した多様な人々の交わりから得られる気づきのプロセスを重視したりサーチ活動として、2022年度より開始。ダンスワークショップや上演、映像制作などを継続的に行っている。

石田智哉

映画監督。筋ジストロフィーによる電動車椅子ユーザー。立教大学現代心理学研究科修士課程卒業。中学生の頃、自分に合った学習方法としてiPadを紹介され、そこでの短編映像の制作をきっかけに映像制作に興味を持つ。ボランティアサークル「バリアフリー映画上映会」実行委員を務め、上映会の企画・運営を行う。初監督作品『へんしんっ!』がびあフィルムフェスティバル「PFFアワード2020」グランプリを受賞。

<とつとつダンス>が身体で語ること

神村 恵(ダンサー・振付家)

<とつとつダンス>に参加しているこの4年ほど、私は国内外さまざまな土地を訪れているが、今年度は9月に京都の舞鶴を訪問する機会があった。ツールキットのためのミーティングを行うことと、<とつとつダンス>が生まれた場所である特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」を訪問することが主な目的だった。

舞鶴の市街地から車で10分以上走り、田畑が広がるのどかな風景の中にグレイスヴィルまいづるはある。窓から見える山の稜線が美しい。打合せ後、広々とした1階の多目的スペースの一角で入居者数名を対象にしたワークショップをすることになった。砂連尾さんはなぜかさっそく靴を脱ぎ、椅子や車椅子に座っている高齢者の前で床に座り込む。相手に手のマッサージなどをして、距離感を近づける。自分の名前をホワイトボードに書き、珍しい苗字であることをアピールする。さらに名前を覚えてもらうための歌を即興で作り、皆で歌う。いつものワーク内容といえそうなのだが、進め方と熱量が無茶苦茶だった。まるで駄々をこねて母親の関心を引きつけようとする子供である。

ワークショップというより戦いのようなと思った。相手からどうにか自分を認識してもらうため、また、ダンスのないところにダンスを立ち上げるための。砂連尾さんやこのチームにとって、<とつとつダンス>は、いわゆるアートのメインストリームではないところで新しい表現を立ち上げ、名前の定まらないポジションを作り生きていくための戦いの場として始まり、今でもそうなのだろうと腑に落ちた。

砂連尾さんの必死な身振りは、相手の認識や社会の枠組みから抜け落ちてしまうことに対する抵抗の身振りでもあるだろう。ワークに参加する認知症の方たちは、ケアされる安心感というよりは、その抵抗のエネルギーを感知し、共鳴するのではないかと思う。そのような戦う姿勢や熱量が<とつとつダンス>の源流に流れていると考えると、一見和やかなワークショップのやり取りにも、また新たなものが見えてきそうな気がする。

神村 恵

ダンサー・振付家。2004年より自身の作品の振付・上演を開始し、国内外で公演を行う。津田道子とのユニット「乳歯」、高嶋晋一とのユニット「前後」など美術家との共同も多く、ダンスに収まらないパフォーマンス作品も発表。近年の主な作品に『彼女は30分前にはここにいた。#2』(2020年、国際芸術センター青森)、『新しい稽古』(2023年、BankART KAIKO)など。場所との応答関係で動かされる身体に関心を持ち、2022年、東京都国分寺市にてスタジオ「ユングラ」の運営を開始。複数のアーティストとのコレクティブ「プロジェクト・ユングラ」を始動し、音楽/ダンス作品『Living Room/Living Sound』の上演や、『ユングラ稽古会シリーズ』などを行う。2021～24年度、セゾン・フェローII。<とつとつダンス>には、2022年より参加。

<とつとつダンス>2025 ツールキットをめぐる旅

砂連尾 理(ダンサー・振付家)

今年度、私たちは、シンガポールのプレイバックシアター実践家であり教育者でもあるマイケル・チェン氏と、<とつとつダンス>ワークショップのツールキットを制作することになった。

マイケルとは昨年1月の大阪、8月のシンガポール、そして9月の京都と、計3回にわたり直接会ったミーティングを重ねたのだが、最後の9月に<とつとつダンス>が生まれた舞鶴の特別養護老人ホームであるグレイスヴィルまいづるへ訪れることとなった。グレイスヴィルまいづるでの<とつとつダンス>ワークショップはコロナの直前である2020年2月以来だったから、実に5年半ぶりの訪問となった。久々の場所はやはり私にとっては心地よい空間で、ゆったりした気持ちになれた。ロビーは広々とし、空間全体にはグレイスヴィルまいづる特有の匂いがあり、その匂いを嗅ぎながら、<とつとつダンス>で関わり、一緒に踊った人たちのことを懐かしく思い出していた。

久々に会った施設長の淡路由紀子さんは相変わらずパワフルだった。マイケルが<とつとつダンス>のことを淡路さんに質問すると、このワークを始めた頃の戸惑い、またそれを継続していくことで起こった利用者だけでなく自身の変化についても語ってくれた。その話を横で聞きながら、淡路さんとともに過ごした時間を振り返り、彼女のエネルギーが<とつとつダンス>を生み出し、築き上げていく上では大きな力だったと改めて感じた。

グレイスヴィルまいづるでの<とつとつダンス>ワークショップはコロナ以降もオンラインでの活動を継続していたが、2023年3月で一旦終了していて、<とつとつダンス>とも関わりが深かった職員の浦岡雄介さんが「陽だまり倶楽部」という場を開いていた。私たちはマイケルとともにその現場も見学させてもらった。浦岡さんは、<とつとつダンス>ワークショップがオンラインへと移行した際に、毎回、画面越しに私たちの活動をサポート、

アシストしてくれた人だ。元中学校美術講師でもある彼は、その日は得意のギターを演奏しながら利用者の皆さんと昭和の歌を歌い、また、ポールを使った体操を行ったりと、のんびりと自由に過ごす、どこかしら「とつとつ」的な面影のあるワークを継続してくれていた。そんな彼が今回の我々の訪問を知り、私と一緒にワークすると良いのではと思う利用者を3人連れてきてくれた。その日に会った利用者はそれぞれ初めて会う人たちではあったが、グレイスヴィルまいづるのロビーでのワークはとても楽しく、私の隣では、4年前からアシスタントとして参加してくれているダンサーの神村恵さんも、やはり楽しそうに利用者と一緒に踊っていた。

翌日、マイケルと私たちは元グレイスヴィルまいづるの看護師で、現在は他の施設に移られた仲井なるみさんを訪ねた。仲井さんはコロナ以前から<とつとつダンス>ワークショップによく参加してくれていた方で、コロナ以降は浦岡さん同様にワークをサポートしてくれた。そんな経験があったからだろうか、彼女は看護師にも関わらず、新たな施設ではレクリエーションの時間も担当されていて、我々の訪問に合わせ、<とつとつダンス>ワークショップを企画してくれた。ワーク終了後、仲井さんはグレイスヴィルまいづるでの経験をいかして、<とつとつダンス>のようなワークをここでもやってみたいんですと語っていた。

ツールキット制作がきっかけとなった舞鶴の訪問で、私たちは淡路さんをはじめとした関係者との再会を果たし、このダンスの痕跡は舞鶴にいる人たちにきちんと受け継がれ、別のかたちとなって続いていることを強く実感しながら舞鶴を後にした。

しばらくして、マイケルからツールキットの原稿案が届いた。その中身は私たちがこのワークに込めた思想・哲学をきちんと汲み取り、読者に優しく寄り添う言葉で編纂されている。早速、ツールキットを使っただけのワークショップトライアルを、昨年の大

阪公演に出演してくれたダンサーの大迫健司さんに行ってもらった。そこで展開された<とつとつダンス>ワークショップは、ツールキットのガイドに添いながらも私のものとは異なり、大迫さん独自の世界が出せるワークになっていた。

舞鶴では別のかたちで、また、マイケルの視点を通して描かれたツールキットから立ち現れてくる新たな<とつとつダンス>。ツールキットを巡る旅を終え、私は美術家の伊達伸明さんが<とつとつダンス>の初演の際に寄せてくれた詩、「とつとつな音」の結びの言葉を思い出していた。

“未整理の過去と手さぐりの未来との間に点描でしか描けない現在がある。
それを描く音、とつとつ。”

過去と未来の邂逅から、<とつとつダンス>はこれからも変貌を遂げていこう。

砂連尾 理

ダンサー・振付家。1991年、寺田みさことダンスユニットを結成。2002年「TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD 2002」にて「次代を担う振付家賞」「オーディエンス賞」をW受賞。2004年、京都市芸術文化特別奨励者。2008年度文化庁・在外研修員としてドイツ・ベルリンに1年間滞在。ドイツの障害者劇団や舞鶴・国内外の高齢者、宮城の避難所生活者への取材を元にした作品など、病、障害を〈生きる過程にある変容〉と捉え、対話を通じたダンス作品を制作する。また、濱口竜介、山城知佳子の映画作品への振付・出演のほか、展覧会、芸術祭に招聘作家として多数参加。著書に『老人ホームで生まれた<とつとつダンス>—ダンスのような、介護のような—』。立教大学 現代心理学部・映像身体学科教授。

●参加アーティスト

砂連尾 理、神村 恵、大迫健司、クロエ・タン、
シルヴァ・イー、カマル・サブラン、
ウルウル・プロジェクト(マレーシア)、
マイケル・チェン、アサノタカオ、
石田智哉、湯浅永麻

●ステージマネージャー／

照明デザイナー (ペナン公演)
藤原 康弘

●音響テクニカルスタッフ (ペナン公演)

エリック・テー、ブレイデン・ロウ、
アフマド・ハリス

●報告会テクニカルスタッフ

尾崎 聡

●通訳

中野美緒(シンガポール)、山口晴美(マレーシア)、
鈴木真奈(舞鶴)

●映像制作・撮影・編集

久保田テツ

●写真撮影

久保田テツ、torindo

●翻訳

石居 萌、久米明子

●コーディネーター

久貝京子、セシリア・チャン(マレーシア)、
オードリー・ペレラ(シンガポール)、

●協力

西川 勝
クオン・ワイ・シウ病院アクティブ・
エイジング・ケア・センター
アリワイ・アートセンター
オクイ・ララ
ヒン・バス・デポ (Hin Bus Depot)
アーツ・エド (arts-ED)

浦岡雄介

特別養護老人ホームグレイスヴィルまいづる
特別養護老人ホーム真愛の家 寿荘
バガン病院(高齢者ケアセンター)
水性 -susei-

●制作統括

豊平 豪

●制作

横田紗世、和田真文

●広報

関 萌美

●主催

文化庁、一般社団法人 torindo

●関連リンク

一般社団法人 torindo

ホームページ

<https://torindo.net/>



一般社団法人 torindo

Facebook ページ

<https://www.facebook.com/torindo21>



Totsu-totsu Dance Instagram

@totsutotsudance

<https://www.instagram.com/totsutotsudance/>



とつとつマガジン (note)

https://note.com/totsutotsu_dance



<とつとつダンス> YouTube ページ

<https://www.youtube.com/>

@totsu-totsudance9801



砂連尾 理 ホームページ

<https://www.jareo-osamu.com/>



<とつとつダンス> 2025年度活動報告書

発行日

2026年3月25日

発行

一般社団法人 torindo

編集

豊平 豪、横田紗世、和田真文

デザイン

垣内 晴

令和7年度障害者等による文化芸術活動推進事業
『日本⇄アジア太平洋 国際交流事業～認知症者・高齢者と介護者をつくる
「アートのような、ケアのような《とつとつダンス》』』

